丹後地域における奈良時代の須恵器について

－窯跡出土資料からみた須恵器の変遷－

筒井崇史

1．はじめに

丹後地域では、丹後国営農地の開発事業に伴う発掘調査によって、弥生時代から平安時代にかけての膨大な資料が蓄積されることになったが、資料を相互に検討する作業は十分に行われないまま今日に至っている。筆者が関心をもつ飛鳥・奈良時代の遺跡の調査例をみると、集落遺跡や須恵器窯跡の調査例は少なく、古墳時代末から奈良時代中頃まで造墓が続けられた横穴墓の調査例が圧倒的に多い。このため、飛鳥時代の土器資料についてはやや恵まれた状況にあるが、奈良時代の土器資料については不明な点が多い。

小稿では、以上のような現状をふまえて、奈良時代の土器資料のうち、須恵器について、資料数は限られるが、時間的にまとまっていると判断される窯跡出土資料から、奈良時代における須恵器の変遷について考察することにしたい。

2．検討資料について

(1)検討資料

小稿で扱う資料は、すでに報告されており、検討の対象とすべき須恵器の実測図が公表されているものを対象とする。検討に用いた資料は、久美浜町堤谷１号窯、弥栄町遠所遺跡須恵器焼成窯３・同４、大宮町阿婆田Ｃ－１号窯・同Ｃ－２号窯・同Ｃ－３号窯・同Ｃ－６号窯の７窯跡出土のものである。また、参考資料として、亀岡市篠窯跡群に所在する石原畑３号窯を取り上げた。(注1) 上記の資料のうち、堤谷１号窯と石原畑３号窯以外については実見することができた。また、紙幅の都合上、遺物実測図などはいっさい省略した。

なお、近年になって、飛鳥時代の土器編年については、橋本勝行氏がその編年案が発表された。(注2) 同氏の編年案は、飛鳥時代を中心とするが、最も新しい第Ｖ段階に位置づけられている堤谷１号窯最終操業面出土資料については小稿でも取り上げており、同氏の編年案との接点になると思われる。

(2)器種分類

ここでは小稿に関わる器種のみ、器種分類を行う。(注3)

蓋Ｂ　宝珠形のつまみをもち、内面にかえりを有するもの。

蓋Ｃ　宝珠形もしくはやや扁平な擬宝珠様のつまみをもち、内面にかえりを有さないもの。口縁端部の形態により、端部が屈曲せず、全体の形状が笠形もしくは笠形に近いもの（Ｃａ）と、端部が屈曲し、全体の形状がやや扁平気味なもの（Ｃｂ）に分けられる。

蓋Ｄ　環状つまみをもつもの。

杯Ｂ　平底に近い底部をもち、高台を有さないもの。器形上の特徴から、４形式（Ｂａ～Ｂｄ）に細分できる。Ｂａは底部がやや丸味を帯び、口縁部が内湾気味を呈するもの。蓋Ａを身に転じたような器形を呈する。Ｂｂは底部が平底で、やや内湾気味の口縁部を有するもの。底部から体部への立ち上がりの屈曲部が不明瞭である。Ｂｃは平底と外上方に直線的にのびる口縁部を有するもの。ＢｄはＢｃと同形態で口縁端部内面に沈線を施すもの。

杯Ｃ　口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底に近い底部をもち、高台を有するもの。口縁部内面に沈線を施さないもの（Ｃａ）と施すもの（Ｃｂ）とに分けられる。また、体部中位ないし下位に緩い稜を有するものがあり、杯Ｃｘとする。

椀Ａ　内湾気味の体部に、輪高台を有するもの。

椀Ｂ　内湾気味の体部に、口縁部が大きく外反するもの。口縁部と体部の境に稜をもち、輪高台を有する。口縁部内面に沈線を巡らすものが多い。いわゆる「稜椀」である。

皿Ａ　口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底の底部を有するもの。口縁端部内面に沈線を施さないもの（Ａａ）と施すもの（Ａｂ）とがある。

皿Ｂ　口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底の底部に高台がつくもの。口縁端部内面に沈線を施さないもの（Ｂａ）と施すもの（Ｂｂ）とがある。

皿Ｘ　短い口縁部に、底部がやや丸底状を呈するものである。口縁部へのナデ調整に強弱があり、口縁部の形状に多様性が認められる。

(3) 分析の方法

対象とした資料のうち、杯Ｂ・杯Ｃについて、法量分布図を作成した。法量分布図の作成には、観察表などにより、法量が明らかにされているものについてはその数値を使用し、実測図のみの場合は筆者が実測図から計測した。したがって、後者の場合、実測値と若干の誤差がある可能性もある。法量分布図は、横軸に口径を、縦軸に器高をとり、径高指数として「（器高／口径）×100」（小数点以下を四捨五入）の計算式を用いて算出した。結果は第１・２図に示すとおりである。

また、報告書などから器種構成についても検討を行った。

3．資料の分析

個々の窯跡の資料数に多寡があるが、法量分布と器種構成の２点から読みとれる点について述べていく。

(1)法量分布

堤谷１号窯最終操業面　杯Ｂは口径12～13cm・器高３～４cmと非常に高い集中度を示す。径高指数の平均値は27である。杯Ｃは口径13～16cm・器高４～５cmと、杯Ｂにくらべ口径にややばらつきが認められる。径高指数の平均値は33と27である。

遠所須恵器窯３　杯Ｂは口径10～13cm・器高３～４cmの範囲に集まる。法量的には２群に分けられ、径高指数の平均値は33と25である。杯Ｃは口径13～15cm・器高４cm前後の範囲に集中するものと、口径17.6cm・器高5.6cmを測る大型の個体１点が報告されている。径高指数の平均値は29と32である。

遠所須恵器窯４　杯Ｂは口径11～14cm・器高３cm前後に集中するものと、口径10.6cmで器高が3.2cmのものと4.6cmのものがあり、口径とともに器高に若干のばらつきが認められる。径高指数の平均値は22・30・40であるが、22前後のものが個体数としては多い。杯Ｃは口径10～21cm・器高４～６cmと、かなりばらつきが認められる。径高指数の平均値は20・28・40と、杯Ｂとほぼ近似した値である。

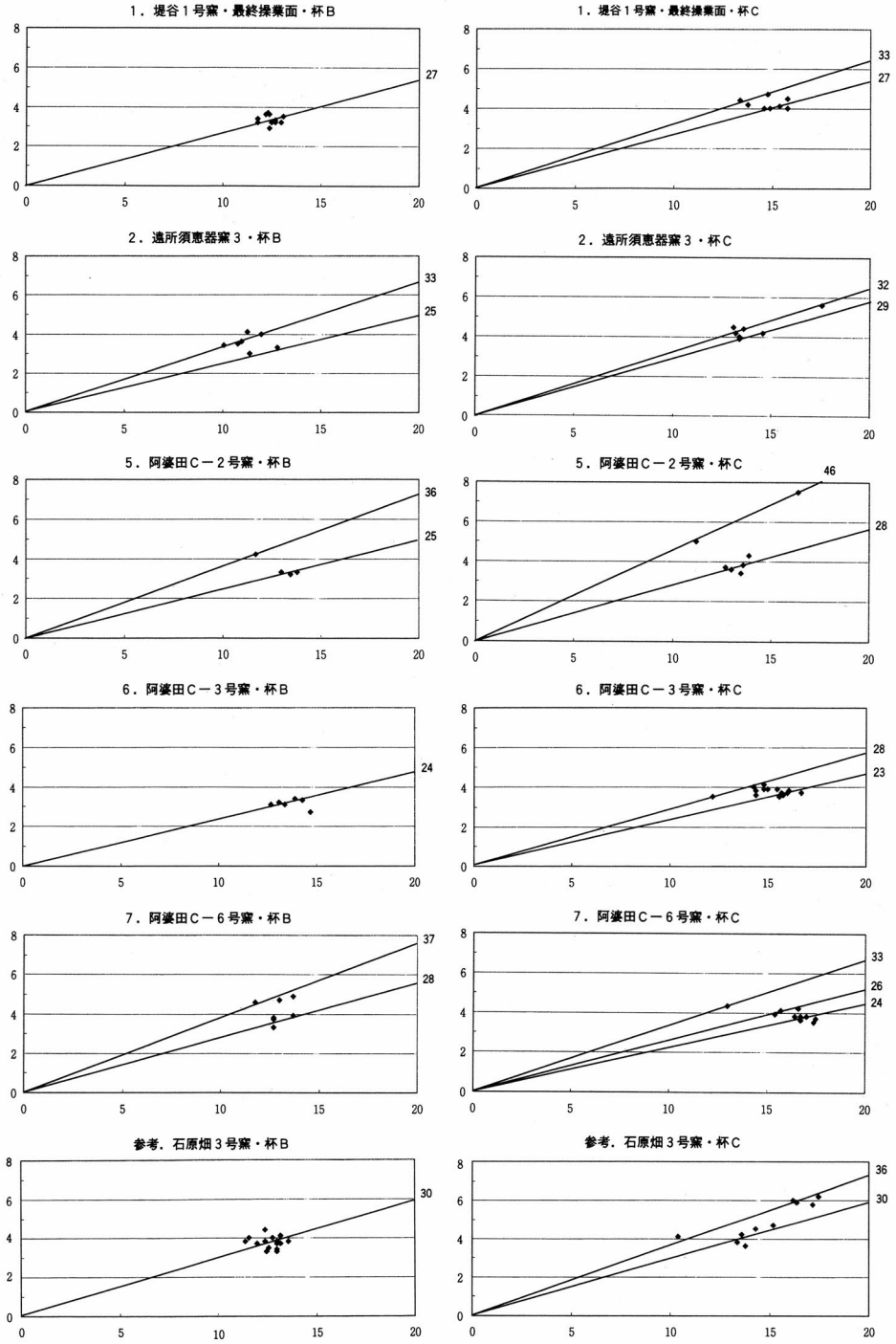
阿婆田Ｃ－１号窯　杯Ｃは口径13cm前後のものと口径17～20cmものとがある。前者は器高３～４cmにまとまるが、後者は器高４cm前後と器高６～７cmのものがあり、出土資料は大きく３群に分けられる。

阿婆田Ｃ－２号窯　杯Ｂは資料数が少ないが、口径11.7cm・器高4.2cmのものと、口径13cm前後・器高３cm前後のものがある。径高指数の平均値は36と25である。杯Ｃは径高指数の平均値が46と28のものがある。前者は口径も器高も大きく異なる個体が確認できる。後者は口径13cm前後・器高３～４cmに集中する。

阿婆田Ｃ－３号窯　杯Ｂは口径13～15cm・器高３cm前後にほぼまとまり、やや器高の低い１点をのぞいて、径高指数の平均値は24である。杯Ｃは法量の小さい１点をのぞき、口径14～17cm・器高３～４cmに集中する。これらはまとまりのある２群に分けられ、径高指数の平均値は28と23である。

阿婆田Ｃ－６号窯　杯Ｂは口径12～14cmでややまとまるが、器高にばらつきが認められる。径高指数の平均値は37と28である。杯Ｃは大半の土器が口径16～18cm・器高４cm前後に集中する。これらはまとまりのある２群に分けられ、径高指数の平均値は26と22である。このほかに、やや口径の小さいものがある。

石原畑３号窯　杯Ｂは口径12～14cm・器高３～4.5cmの範囲に集中する。径高指数の平

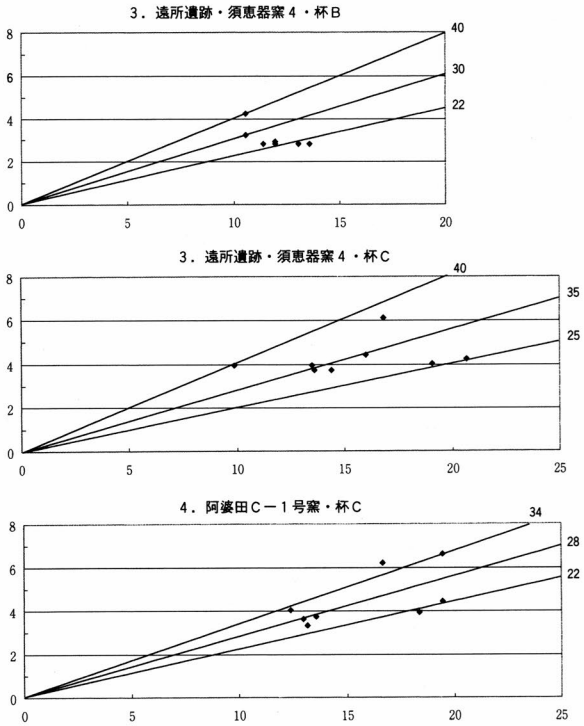


第１図　各窯跡出土杯Ｂ・杯Ｃ法量分布図(1)

均値は30である。杯Cは法量の小さな1点を除くと、口径17cm前後・器高6cm前後にまとまるものと、口径14～16cm・器高3.5～5cmにまとまるものとがある。後者は、前者よりも口径・器高とも小さい。径高指数の平均値は35と30である。

(2)器種構成

遠所須恵器窯3　蓋Ｃａ・杯Ｂｂ・杯Ｃｘ・皿Ｘなどから構成される。器種構成上、特徴的なものとして皿Ｘがある。口径18.1～19.9cm・器高3.5～4.6cmを測り、法量の大きい点が注意される。口縁部に軽くナデ調整を施し、底部はやや丸底気味を呈する。



第2図　各窯跡出土杯Ｂ・杯Ｃ法量分布図(2)

遠所須恵器窯4　蓋Ｃａ・杯Ｂｂ・杯Ｂｃ・杯Ｃａ・杯Ｃｘなどがある。杯Ｂｂ・杯Ｃｘはごくわずかである。

堤谷1号窯　最終操業面から出土した土器を対象としたが、このほかにも同窯跡では灰原を中心に層位的な資料が得られており、丹後地域の須恵器の相対的な変遷を考える上で重要である。最終操業面に先行すると思われる灰原第Ⅲ層には、蓋Ｂ・杯Ｃｘ・皿Ｘなどがある。皿Ｘは口縁部に強いヨコナデを調整を施して稜をつくり、底部が丸底気味を呈する。口径16.8～18.0cm・器高3.2～3.6cmを測り、遠所須恵器窯3の皿Ｘとは、法量や口縁部の形状が少し異なるものの類似した器形を呈する。ちなみに、これらの器種はいずれも最終操業面には含まれていない。

最終操業面では、蓋Ｃａ・杯Ｂｃ・杯Ｃａのほか、皿Ａａ・皿Ｂａがある。基本的な器種構成の点において、平城宮などにおける器種構成に類似すると考えられる。

阿婆田C－1号窯・C－2号窯　蓋Ｃａ・Ｃｂ・Ｄ・杯Ｂｃ・杯Ｃａ・椀Ａのほか、皿Ａｂ・皿Ｂｂがある。また、Ｃ－1号窯の未報告資料中に椀Ｂの破片が含まれていることを確認した。また、Ｃ－2号窯からは高台がやや高めの皿Ｂａや環状平瓶も出土している。

いずれも類例の乏しい器種である。

阿婆田Ｃ－３号窯　堤谷最終操業面と同じく、蓋Ｃａ・杯Ｂｃ・杯Ｃａなどからなる。

阿婆田Ｃ－６号窯　蓋Ｃａ・杯Ｂｂ・杯Ｂｃ・杯Ｃａ・杯Ｃｘがある。蓋Ｃには天井部に突帯を有するものがある。丹後地域では、大田鼻28号横穴から同形態の土師器蓋が出土している(注4)ほか、大阪府陶邑古窯址群でも類例がある。杯Ｃｘは量的に多くない。

石原畑３号窯　蓋Ｃａ・蓋Ｄ・杯Ｂｃ・杯Ｃａ・皿Ａａ・皿Ａｂ・皿Ｂｂ・椀Ａなどからなる。器高の高い杯Ｃａが含まれる。

４．考察

(1)資料の検討

上記資料について相対的な変遷過程を明らかにする作業を試みる。形態や法量、器種構成の変化などについては、平城宮などにおける研究成果を参考(注5)にしつつも、丹後地域における変化の様相を明らかにした上で、作業の基準とした。

まず、器種構成の点で、筆者が注目したものとして椀Ａがある。椀Ａは、阿婆田Ｃ－１・Ｃ－２号窯、石原畑３号窯で確認できる。また、これら３基の窯には皿Ａｂ・Ｂｂも含まれており、器種構成上の特徴となっている。一方、堤谷１号窯最終操業面に先行する灰原第Ⅲ層や遠所須恵器窯３には、杯Ｃｘ・皿Ｘが含まれる。また、堤谷１号窯最終操業面・阿婆田Ｃ－６号窯・同Ｃ－３号窯・遠所須恵器窯４では、皿Ｘや椀Ａは見られず、杯Ｂｃ・杯Ｃａを中心に構成され、杯Ｃｘが少量確認できる。

以上のことから、椀Ａ・皿Ａｂ・Ｂｂが含まれる一群(以下、第３群)、杯Ｃｘ・皿Ｘが含まれる一群(以下、第１群)、椀Ａ・皿Ａｂ・皿Ｂｂ・皿Ｘのいずれもが含まれない一群(以下、第２群)と、器種構成の点で大きく異なる３つのグループに分けることができる。窯跡名でいうと、第１群は遠所須恵器窯３(および堤谷窯跡群灰原第Ⅲ層)、第２群は堤谷１号窯最終操業面・阿婆田Ｃ－６号窯・同Ｃ－３号窯・遠所須恵器窯４、第３群は阿婆田Ｃ－１号窯・同Ｃ－２号窯・石原畑３号窯である。

次に杯Ｂ・杯Ｃの法量分布について、先述した径高指数の平均値を見やすいように第１表にまとめた。この表に示したように、径高指数の値から杯Ｂ・杯Ｃともに４つのグループ(器種といいかえても良い)が認められる。しかし、個々の窯ごとにみると、杯Ｂの径高指数の値からはおおむね１ないし２グループである。これに対して、杯Ｃの径高指数は少なくとも２グループあることが確認され、窯によっては３グループ認められるものもある。また、第２群の遠所須恵器窯４や第３群の阿婆田Ｃ－２号窯においては、杯Ｂ・杯Ｃがともに径高指数の高い一群が含まれるという特徴がみられ、注意される。さらに、第３群の

第１表　窯別径高指数一覧表

			杯　B				杯　C			
第１群	遠　所	須恵器窯３		33	25			32	29	
第２群	阿婆田	C－６号窯	37		26			33	26	
	堤　谷	１号窯最終操業面			27			33	27	
	阿婆田	C－３号窯			24				28	
	遠　所	須恵器窯４	40	30			40		28	
第３群	石原畑	３号窯		30				35	30	
	阿婆田	C－１号窯						34	28	
	阿婆田	C－２号窯	36		25		46		28	

大型品　　やや小さめの中型品
やや大きめの中型品　　小型品

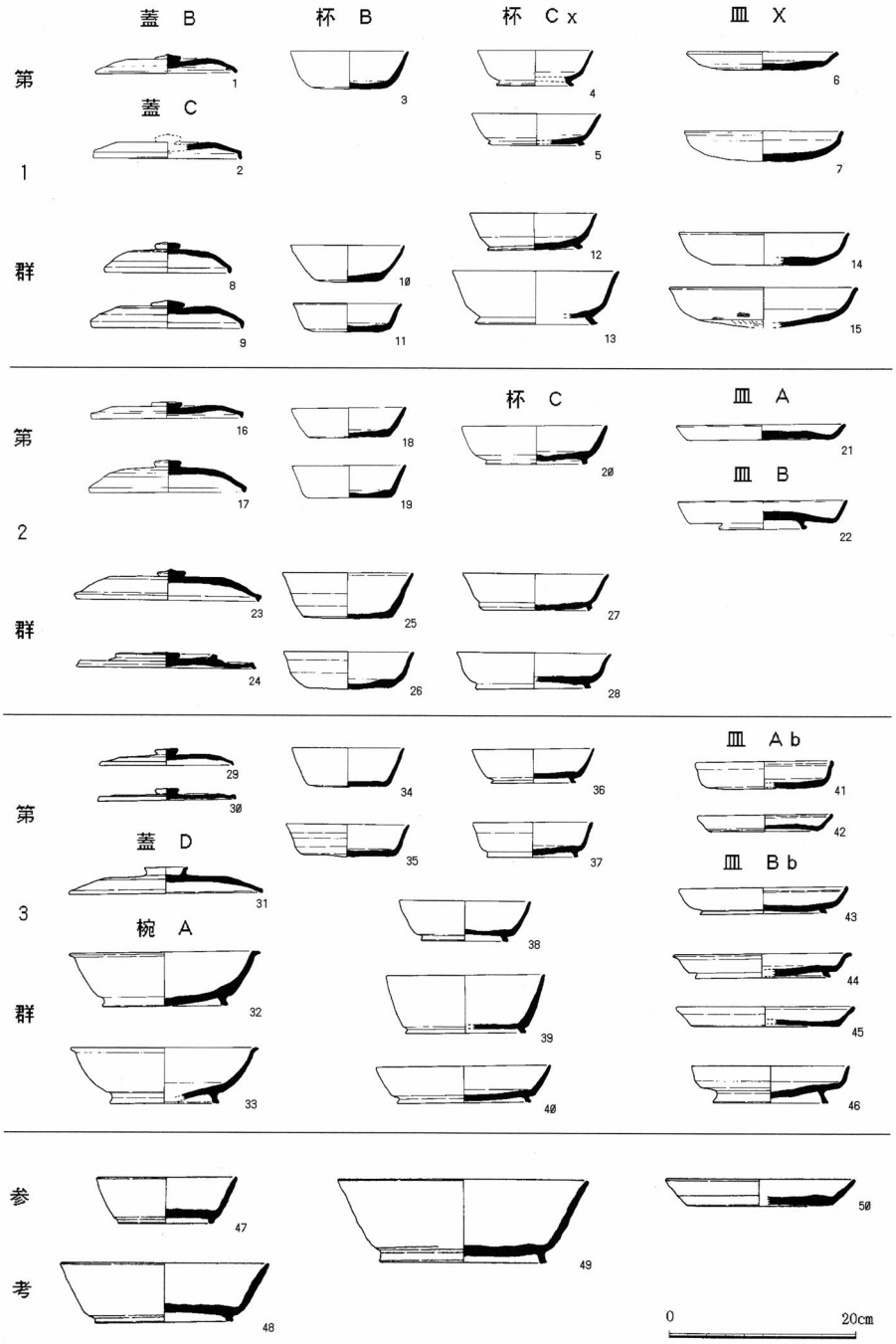
阿婆田C－１号窯の法量分布図を見ると、同一口径における器高の高低による、明瞭な器種分化が確認できる。

以上のように、第１・２群では法量による器種分化は、杯B・杯Cともに１ないし２器種であると考えられる。一方、第２・３群の一部では、特に杯Cの法量による器種分化が認められるようになる。

(2)相対編年について

各群の前後関係については、平城宮域における調査成果を参考にすると、第１群において、蓋Ｃａを主体としつつも、１点とはいえ蓋Ｂが含まれるような器種構成は平城宮Ⅰ段階にみられる。第３群には皿Ａｂ・皿Ｂｂなど口縁部内面に沈線を施すものが多くみられる。これは平城宮Ⅱ段階に出現するとされる須恵器杯Ｃに類似した特徴であるが、必ずしも同一の器種とはいえない。さらに、椀Ａ・椀Ｂに類似した椀形態も認められないが、やや深手の椀形態に近いものとして杯Ｅ・杯Ｆ・杯Ｌがあり、これらの出現もこの段階とされる。以上のことから、皿Ａｂ・皿Ｂｂ・椀Ａ・椀Ｂの出現時期は平城宮Ⅱ段階を遡らないと考えられよう。第２群については、蓋Ｃａに杯Ｃａとごく少量の杯Ｃｘが伴い(あるいは含まれない)、かつ第３群に特徴的な器種が一切含まれないことから、第１群に後続し第３群に先行すると考えられる。なお、第１群では、堤谷１号窯灰原Ⅲ層には蓋Ｂがみられたが、遠所須恵器窯３では蓋Ｃａに皿Ｘ・杯Ｃｘが伴うことから、ごく短期間の時間的な須恵器の様相の変化を示すものと考えておきたい。

また、第２の遠所須恵器窯４などにおいて法量による器種分化が顕著に認められることから、第２・３群において法量による器種分化によって器種数が増加すると考えられる。第２・３群は先に検討したように平城宮Ⅱ段階を遡らないことから、平城宮域において最も器種数の多い時期に一致している。



第３図　須恵器の変遷図

１～７；堤谷窯跡群灰原第Ⅲ層　８～15；遠所須恵器窯３　16～22；堤谷１号窯最終操業面
23～28；阿婆田Ｃ－６号窯　29～32・36・39・40～44；阿婆田Ｃ－１号窯
33～35・37・38・45・46；阿婆田Ｃ－２号窯　47～50；但馬国分寺ＳＤ01

以上をまとめると、第３図のような変遷図となる。

(3)実年代について

以上に検討した丹後地域における須恵器の変遷と、平城宮土器編年を比較すると、器種構成全体をみた場合、独自の地域色が随所に見られる。第１群では、皿Ｘの存在や、杯Ｂ・杯Ｃの法量による器種分化があまりみられないなどの特徴がある。第３群では平城宮域では同一の器形を見いだしにくい杯Ｃｂ・皿Ａｂ・皿Ｂｂ・椀Ａなどが器種構成の中で高い比重を占める。また、第２・３群では法量分化による器種の増加傾向が認められる。

以上のような地域色を有する須恵器に対して、実年代を当てはめるための材料はほとんどないのが現状である。そこで、先に分類した３群について、平城宮土器編年などから、筆者なりの年代観を示しておくこともしたい。

まず、堤谷１号窯灰原第Ⅲ層出土の蓋Ｂは、先述のように、器種構成上、平城宮編年においてかえりのある蓋が消失する平城宮Ⅰ段階に併行すると考えられ、実年代の１点を押さえることができる。一方、より新しく位置づけられる第２・３群のいずれの資料においても、実年代を知り得るような手がかりは、今のところ皆無に等しい。これは第３群に後続する須恵器の様相が明らかになっていないこととも関係する。

現時点で、実年代を考える上で参考になる資料として、天平神護三年(＝神護景雲元年、767年)の紀年銘のある木簡などが出土した但馬国分寺ＳＤ01出土の土器資料がある。(注6) 公表されている資料は少ないが、実測図からは但馬国分寺ＳＤ01出土資料には、第３群に特徴的な杯Ｃｂ・皿Ａｂ・皿Ｂｂ・椀Ａなどは確認できないものの、阿婆田Ｃ－１号窯にみられる杯Ｃに類似した径高指数を示すことが確認できる。やや問題を残すとはいえ、第３群の下限を少なくとも神護景雲年間に求めることのできる可能性がある。これは石原畑３号窯の略年代を750年とする年代観(注7)や阿婆田Ｃ－１号窯・同Ｃ－２号窯を平城宮Ⅲ～Ⅳとする年代観(注8)とも矛盾しない。

以上のことから、なお、検討すべき余地があるとはいえ、第１群を奈良時代初頭から前半に、第２群を奈良時代前半から中頃に、第３群を中頃からやや後半よりに、それぞれ位置づけたい。

５．小結

これまであまり取り上げられることのなかった丹後地域の奈良時代の須恵器について、編年的検討を加えてきた。相対的な変遷については、資料数が十分とはいえなかったが、奈良時代初頭からやや後半よりにかけての須恵器の変遷を明らかにすることができた。しかし、奈良時代後半以降の須恵器ならびに土師器編年については、今後の資料の増加に期待

するところが大である。もちろん、その結果として、今回提示した年代観の変更を求められることもあろう。

このように、丹後地域の古代の土器編年を考える上で、なお検討すべき課題は多く残されている。今後これらの問題点を1つでも明らかにできるよう努力していきたい。

謝辞：本稿作成にあたり、各地の土器資料の実見、遺物の検討の機会をもった。その際には下記の方々にお世話になった。芳名を掲げて感謝の意を表したい(順不同・敬称略)。

長谷川達・橋本勝行・橋本俊介・加藤晴彦・松本達也・水野聡哉

また、当調査研究センターの職員各員からは有益な助言をいただいた。合わせて感謝の意を表したい。

(つつい・たかふみ＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1　橋本勝行「丹後における7世紀の土器」(『太邇波考古　第12号』両丹考古学研究会)　1999

注2　今回取り上げた8窯跡の報告書は下記の通りである。

遠所須恵器窯3・同4：増田孝彦ほか『遠所遺跡』(『京都府埋蔵文化財調査報告書』第21冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1997

堤谷3号窯：肥後弘幸「堤谷窯跡群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』京都府教育委員会)1993

阿婆田窯跡群：森　正「阿婆田窯跡群」(『京都府埋蔵文化財調査概報』第44冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

石原畑3号窯：石井清司「石原畑窯群」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』第2冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注3　器種の名称は、舞鶴市浦入遺跡の報告書における器種分類に準じた。

辻本和美・田代　弘・筒井崇史ほか『浦入遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第29冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2000

注4　岡田晃治「大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会)　1987

注5　おもに参考とした平城宮域における土器編年の文献は下記の通りである。

西　弘海ほか『平城宮発掘調査報告』Ⅶ(奈良国立文化財研究所)　1976

巽淳一郎ほか『平城宮発掘調査報告』ⅩⅠ(奈良国立文化財研究所)　1982

玉田芳英ほか『平城宮発掘調査報告』ⅩⅣ(奈良国立文化財研究所)　1993

注6　高井悌三郎ほか『但馬国分寺木簡』(『日高町文化財調査報告書』第5集　日高町教育委員会)　1980

注7　注2石井報告124～128頁参照。

注8　注2森報告30～38頁参照。